

連載：研究者になる！－第84回－

大学院横断教育プログラム推進センター・特定准教授 木村 里子



●失敗続きから、運命の出会い

通っていた高校で出される膨大な課題をこなしつつ、友人と青春を謳歌していた当時、研究室で実験をする研究者になる想像は少ししていたものの、フィールドワーカーになるとは微塵も想像していませんでした。将来図はぼんやりしたままだったので、職業の選択をこの時点ですることができず、選択肢の多そうな京大農学部への進学を決めました。1回生の頃は、浪人した反動もあり、典型的に遊びました。まさか講義をする側にまわるとは思ってもいませんでしたが、この頃の経験のお陰でサボりがちな学生の気持ちもよくわかります（笑）。2－3回生の頃は家庭教師のバイトに明け暮れ、貯まったお金で海外旅行へ何度も行きました。3回生の学生実験で失敗が続き、細かな作業が苦手だと気づいた私は、大きな生き物ならば…！と単純な理由で研究室を選び、4回生で研究室配属されてからは研究一色になりました。

先生が、学生の意思を尊重してくれる研究室だったので「何の研究をしたいですか？」と聞かれた時に「海で大きい生き物…クジラの研究がしたい！」と答えたところ、外部機関にいる水中音響でイルカの研究をしている先生となら、一緒に研究が可能だと紹介されました。そして、中国でその先生のスナメリの調査に同行したことが、研究に夢中になるすべての始まりでした。

その後、大学院に進学したものの一般就職と悩み、修士1回生の時には就職活動もしました。しかし研究がとても楽しく、もう少し続けたいと思い、やれるところまでやろう！いけるところまでいこう！と決意し博士後期課程へ進学を決めました。

●決定木でたどり着いた先はイルカの研究者！

私は、最初から研究者を目指して頑張っていたわけではなく、目の前にある二択の選択肢を選ぶことを続けていくうちに研究者にたどり着いた、と感じています。研究者は大変な職業だと思っていたので、このような感じで研究者になることはためらわれましたが、尊敬する先生に「就職も研究もどちらも楽しい、楽しそうだと思うなら、君はどちらの道へ行っても大丈夫だよ」と言われ、やっと研究職につく決心がついたのです。

そして現在、水中の大型生物、主に小型鯨類（イルカ）などを対象とし、海洋生物を定量的に観察する手法の開発、および手法を用いた生態解明に取り組んでいます。生物が発する音を利用した受動的音響観察手法、動物に直接機材を装着して行動データを得るバイオリギング手法などを用い、対象生物が発する音の特性や発声行動を調べたり、対象生物が「いつ、どこに、どのくらいいるのか」という基礎的な生態情報を明らかにしたりしています。また、沿岸における船舶航行や洋上風力発電などの騒音が生物や環境に与える影響評価、飼育施設などにおける生物のストレス評価も行っています。

その研究の過程で、生物（哺乳類）研究者である自分自身が妊娠・出産できたことは大きな経験でした。妊娠は大変でしたが、まるで繁殖生理学実習をしているかのようで、その時自分のお腹の中で何が起きているか、別の動物だったらどうなのか、調べたり考えたりすることがとても楽しかったです。

●すべてにおいて一流をめざす自分であり続けたい

研究と生活（家事・育児など）の両立、ということに関しては、私は全くできていないとは思っていません。家は散らかりっぱなし、研究も妊娠出産していた数年分は遅れています。研究も生活も何事も妥協したくない性格なので、もっと色々な外部のサービスを利用できれば楽なのかも…と思うことも多いですが、子どもが小さい今は何事も楽しむことを第一に心がけています。母、妻、研究者、すべてにおいて一流になりたいと日々願いながらも、まずは今の自分の状況を受け入れて楽しむことができていると思います。

大切にしているのは、何事も自分で選ぶ、自分で決めるということです。私は、進路を決める時、就職する時、結婚する時、子どもを持つかどうか決める時、それなりに悩んで、選択肢のメリット・デメリットを考えながら、常に自分自身で後悔のないように決断してきました。結婚も出産もせず海外で研究をする選択肢、研究者にならず一般就職をしたりもっとたくさん子どもを産んだりする選択肢などもあったでしょう。それはそれで楽しそうと今なら思えますが、その時自分が決めたことに後悔はありません。どんな結果であっても自分で考えて決めたことならば、悔いなく楽しめると信じ、一日一日を大切に生活しています。